

## この事例の行為について

- ・身体拘束の3要件を満たさない車いすへのベルトによる拘束は、身体拘束であり、**身体的虐待**と考えられます。
- ・高齢者に対し、「寝たきりになる」「このままではだめ」といった発言や叱咤すること（大声を上げて励ましたり、叱ったりして、相手の気持ちを奮い立たせること）は、高齢者が心理的にダメージを受ける可能性もあり、**心理的虐待**と捉えられる可能性があります。
- ・辛くてベッドに戻りたいと訴えている高齢者を放置し、別の業務をすることは、**介護・世話の放棄・放任（ネグレクト）**とも考えられます。

## 防止のためのポイント

### <個人でできること>

#### ●自分のケアを振り返ってみましょう

- ◆身体拘束と考えられる言動について振り返る
  - ・車いすに座らせるために、ベルトで物理的に行動を制限（身体を固定すること）することは身体拘束「緊急やむを得ない」場合以外の身体拘束は、原則すべて高齢者虐待
  - ・車いす座位が保てない場合の対策について、アセスメントする（ベルト以外の座位保持方法、車いす以外を利用する方法等、代替方法を検討する）
- ◆高齢者の行動についてアセスメントを丁寧に行い、対応を検討する
  - ・車いすに乗りたくない理由は何か、痛みが強いからか、どこが痛いか、ベッドで横になりたい理由があるのか、他に理由はないか等を詳細にアセスメントし、対策を検討しましょう。高齢者の意向や行動の理由を把握し、理解することで、具体的な対策の検討をする
  - ・また、リハビリとして車いす移乗が適切かについても検討し、正しいリハビリを検討実施する必要がある
- ◆ケアの方法等に関しては、一人で判断せずに、同僚や上司に相談することも大切
  - ・ケアの技術や知識は、日々進歩します。より良いケアを実施するために、新しい情報を取り入れ、自己研鑽することも個人でできる重要な対策

### <チームでできること>

#### ●身体拘束の正しい知識を共有し、身体拘束を行わないための取り組みを検討しましょう。

- ◆身体拘束にあたる言動、身体拘束の弊害や「緊急やむを得ない」場合の要件について再確認する
  - ・「緊急やむを得ない場合」とは、切迫性・非代替性・一時性をすべて満たし、必要な手続きを行い、記録に残すこと
  - ・身体拘束に関する規定や考えかたを理解し、身体拘束はしない
  - ・訴えが強い高齢者を一人の職員で対応することは困難であるため、「身体拘束をしない」ために、チームで協力したり、見守る方法を検討することが重要

#### ●高齢者に関わる職員それぞれの視点で、見出した課題を共有し、チームでケアを見直しましょう。

- ・Aさんの状態変化があるにも関わらず、ケアプランの十分な見直しがされていない
- ・医学的判断に基づくリハビリ計画の作成や、身体にあった車いすや座位保持等福祉用具の選定、車いす以外の日中過ごすための椅子の検討等、基本的ケアの見直しが必要
- ・車いすは、移動用具のため、長時間座る目的のものではないことへの気づきも必要
- ・高齢者に関わる全職員それぞれの視点で、課題を見出し、ケアを見直すことが重要

### <組織でできること>

#### ●「身体拘束」について学ぶ機会を設けましょう

- ・身体拘束に関する学習の機会を定期的に設ける
- ・学習した内容が実践に活かされているかを確認、評価する
- ・高齢者の理解とそれに基づいた適切なケアの提供について学習することで身体拘束が発生しない環境を作る

#### ●「身体拘束」や「虐待」に対する施設・事業所の方針を明確にし、周知徹底を図りましょう

- ・「やむを得ない」「しょうがない」という安易な身体拘束が、虐待であることを伝え、「身体拘束は一切行わない」方針を明確にする
- ・身体拘束を行わずに対応する方法について、施設の体制整備状況がどうなっているか、どのような体制があるかを明確にしましょう。（例えば、委員会の開催状況や職員研修等）
- ・現場の中核となる職員を育て、「身体拘束」や「虐待」に対する考えや対応を周知徹底させる